

原告団

遺族・CO患者 判、災害責任 追及、特集号

第二百二十六号

原告団レポート

CO患者 塚本正勝さん

リートの建物も赤く染めている日 暮れときであった。

病室に入ると付添婦さんが夕食を食べさせる準備をしていた。 やがて食事がはじまる。食欲旺盛なのか、好き嫌いが無いのか、配膳されたご飯とおかずを口にいっぱいに入れると手早く食べる。 食事が終わった。塚本さんは、食器を両手で握り、ペロペロとなめはじめた。

空腹のまま

塚本正勝さん(昭和二年四月三十日生まれ)が入院している天領病院内科病棟を訪れたのは、つる状態が常に頭の中にあるのか、バナナ、菓子を手渡されるたびに



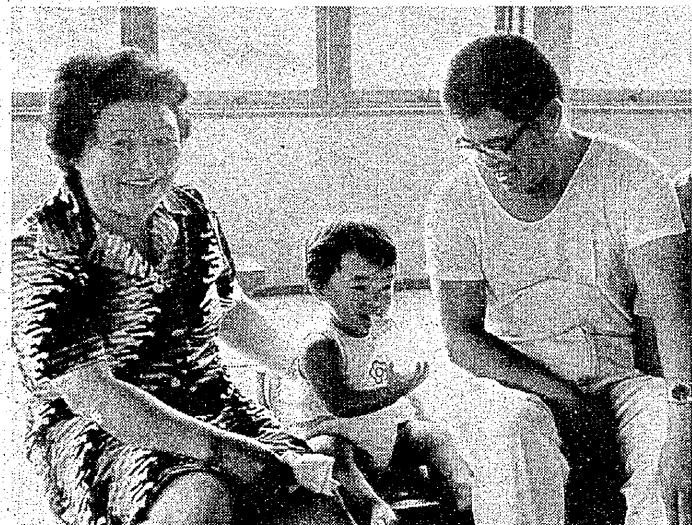
三池闘争中の昭和35年夏、万田宮前分会の団結集会で。(右側眼鏡の人が正勝さん)

がまだし者

塚本さんは昭和二年、大牟田市宮原町二丁目、駿馬満宮さんのそばで生まれ育った。

昭和十七年三月三十一日三川鉦に入社し、三河内坑内機械工となった。昭和二十年の戦争末期、十八歳になると志願兵として鹿児島県鹿屋で特攻隊員となる。ここで終戦を迎え、再び三川鉦で働くこととなった。父・梅太郎さんと一緒に中に入ってきた。

奥さんのみすえさんとの結婚は昭和二十三年九月十五日で、熊本県矢部町出身の人が同じ職場にいて中に入ってきた。



奥さんのみすえさん、初孫の恭一さんと(昭和51年夏、労災病院で)

ひとつの命

闘争が終わり職場に帰ると、きびしい差別が待っていた。賃金は川鉦の坑外で災害があったといっただけで、仕事がきつくなった。

あれから二十一年、油断できぬ症状

会社への憎しみ消えず

責任をあいまいにすることは許せない

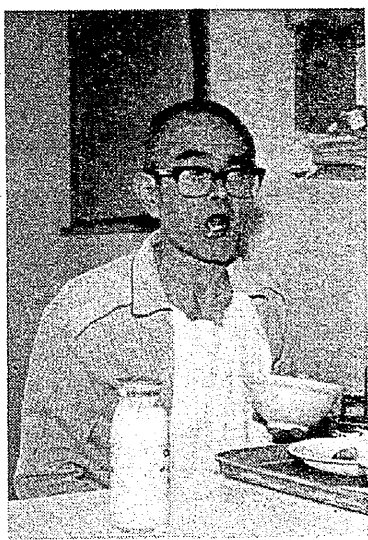
夕で買物にでかけ、弁当を作った。出勤していた。将棋に熱中していた。人より早く出勤して組合の事務所に寄り、愛好者同志が二番、三番指して入坑するのが日課のようになっていった。

家族ぐるみ

「荒尾市民病院の一番奥に伝染病の患者が入院する棟があります。そこに清水さんや西田さんたちが一緒にいました」

真実の声を

「同じく方で宮坂町に住んでいる池松さんが自力で脱出して帰ると聞いたのでたすねに行きまして。池松さんは言葉少なに、非常に弱っていて、一人で上がれないようだったと語りました」



ご飯とおかずの区別もなく無心にスプーンで口に運ぶ。

風化許さず

正勝さんが労災病院に入院してから、みすえさんは働きに出た。昨年の十月定年になって、大牟田市内の信号電材メーカーをやめるまで十八年八月働いた。

「いろいろな仕事をしてきました。中小企業は、裁判とか集金などで休むと好まれませんからね。苦勞しました」

正勝さんはごく最近、入院していた玉名の病院から外泊中に、トイレに下りてある丸い消臭剤をかじり、一時危篤状態になり、体重も四十二キロと激減していた。

「やっ」と四十六キロのうちに増えましたが、油断できないのです。ドアを開けて外に出ますので、付き添いさんも大変です」

裁判闘争もいよいよ大詰めになった中で、みすえさんは三井が責任をあいまいにして逃げようとするのを絶対に許せないと断言している。

「戻しん爆発からやがて二十一年、お父さんと同様に症状はちがいますが、熊大や九大に入院し、苦しい生活を家族ともども強いられていきます」

「私は、父がまだ丈夫な体で仕事に行っていたころの思い出を一つだけおぼえている。父は仕事を終わってバイクに乗って家に帰ってきた。そして、私に『みやげだぞ』と書いてキューピーのお人形